

開催地名：静岡県袋井市	
開催日時	令和元年 10 月 20 日（日） 9：30～11：30
開催場所	袋井市東分庁舎コスモス館
語り部	京 英次郎 （宮城県仙台市）
参加者	自主防災隊 約 200 名
開催経緯	<p>袋井市内では自主防災組織の組織率は 100 パーセントであり、防災訓練参加者も 7 割弱の住民が参加している。しかしながら、防災訓練では市から出された課題訓練を実施しているが、住民自ら共助について考え、そのために必要な話し合いができていない自主防災隊は多くはない。災害発生時には公助よりも共助や自助が大切であり、今一度被災者から話を聞くことで、今後の訓練や各地域が抱えている課題について、課題解決に向けた取り組みを始めるきっかけとなしてほしい。</p>
内容	<p>（1）被災地での避難所運営について</p> <p>自助、共助、公助のうち、公助が一番当てにならない。公助が当てになるのは、早くて震災発災後 1 日、または 3 日ぐらいあとである。日常、どのくらい自分がぜいたくな生活をしているか考えていただきたい。災害時は電気、ガス、水道、電話、交通機関などのライフラインが全部とまってしまう。自分たちは、トイレットペーパーやティッシュペーパーを必要以上に使う生活をしているが、避難所の簡易トイレは水洗ではないので、拭いた汚物のごみになる。また、実際に東日本大震災の際には、避難所のトイレでトイレットペーパーが不足していた。1 回あたり 20 センチメートルは節約してもらいたい。この意識を普段から是非心掛けていただきたい。</p> <p>普段からできないことは、非常時にもできないと考えていただきたい。普段何も考えていない人たちが、東日本大震災のとき避難所に押しかけてきて、行政を頼っていた。仙台では避難所は何十カ所もあったが、あとで調べてみると、地域のリーダーがいて、普段から訓練したり、有事の際の対応を決めていたり、お互いの顔が見えていた地域はうまく機能していた。避難所が提供されても、仕切る人は誰もいない。運営するのは市長、防災担当職員、消防などではなく、避難者自身である。</p> <p>避難所では、快適な生活は待っていない。仙台では、102 万人の市民に対して、19 万人分が 3 日間しのげる水と食料しか用意していなかった。本当に助けを求めている人のみに配布すると伝えていたが、500 人から 1,000 人の群衆が避難所に押しかけた。ほしいと 1 人が言えば、皆が言う。配布できなかった人には、自前で対応してもらおうしかない。また、避難所には手ぶらで行くべきではない。その一方で、避難所にある防災用品や食べ物を全て皆が見える所に置き、「これし</p>

かない」と実情を知らせたリーダーがいたところは、混乱せず、うまくいった。食料がほしいのは皆同じだが、見せることで不公平さがなくなったと言える。リーダーは、まとめ役ではあるが、同時に避難所に集まった人たち全員にリーダーの気持ちになって考えさせることも重要である。

(2) 住民に対する避難誘導について

災害現場で救助、消火、救急等の活動をする際の引き際の物差しは、世の中で一番大切な自分の命である。これは危険だと判断したら、まず1回退却して自分の身を守り、体制を整えて出直すべきということだ。防災のリーダーは、自分で自分の身を徹底して守れなければ活動できない。それを考えないで災害に遭った場合、失敗するリスクが高い。

リーダーの素質とは何か。人は、まるで想像できない災害に遭い足腰が立たなくなってもリーダーになれる。リーダーは、とにかく死なないことと、声を出すことが重要である。東日本大震災で揺れが始まったとき、消防署にいた私は、「身を守れ、落ち着け」と言った。だが、リーダーになるのを阻害するものがある。人が集まった中で、自分だけがここで声を出すのはまずいのではないか、誰も言わないのに自分だけ言うのはおかしいのではないかという気持ちである。その気持ちがリーダーをでき損ないにになってしまう場合がある。



開催地より

非常にわかりやすいお話で、参加者は皆熱心に聴いていた。「普段できないことは、非常時でもできない。」という言葉は、参加者以上に、行政職員が痛感している。今後、地域防災力の向上機会に向け、市内の防災リーダー育成や避難所運営組織の強化に尽力していきたい。